

現代思想における民主主義論の比較検討

—ジョルジョ・アガンベンを中心に—

Comparative Analysis of Democratic Theory in Contemporary Thought with a focus on Giorgio Agamben

M21助人33

代表研究者 長 島 皓 平 慶應義塾大学 法学研究科 後期博士課程
Kohei Nagashima Phd candidate, School of Law, Keio University

In this project, I tried to examine and evaluate the contemporary democratic discourses in the political theory. In particular, I aimed at clarifying and assessing the complex character of the democracy. In order to perform the work, we chose such thinkers as Giorgio Agamben, Hannah Arendt, and Judith Butler. In the first place, Arendt has been admired as one of the most important theorists in the 20th century. On the other hand, Agamben and Butler still remain too contemporary to analyze in an academic way.

Therefore, we situated Arendt as a starting point against which we deal with the evaluation of Agamben and Butler. In this analysis, we put an emphasis on some topics such as biopolitics, sovereignty and political action. Particularly, the reading of ‘Human Condition’ by Arendt played a grounding role in preparing the premise for this entire project. Then, ‘Homo Sacer’ of Giorgio Agamben and ‘Precarious Life’ of Butler are examined in contrast with the work of Arendt.

Through this process, we reached the conclusion as follows. First, Arendt tried to reconstruct the notion of ‘the political’ by returning to the ancient Greek and take advantage of the founding moment in the ancient Rome. As a result, she ended up constructing democracy in a rigorous republicanism way, although it is impossible to underestimate her importance in the postwar political theory.

In the wake of this attempt, contemporary thinkers such as Butler and Agamben tend to introduce a dynamic moment in the democratic discourse, even though they go as far as to identify as a kind of anarchist.

As a conclusion, the comparative analysis of democratic theory opens up potential paths for developing an anarcho-democratic concept of politics in the coming world.

研究目的

本研究の目的は、現代政治思想における民主主義論の比較検討である。とりわけ、ハンナ・アーレント、ジュディス・バトラー、ジョルジョ・アガンベンらの思想を中心的に取り上

げることで現代における民主主義論の位相を明らかにし、その多様なあり方とそれぞれの意義を検討に付した。

すでに全体主義批判を嚆矢として、戦後政治思想に多大な影響を及ぼしたアーレントの政治思想における民主主義を出発点として、とり

わけポストモダン思想と呼ばれる潮流の先端に位置するバトラーとアガンベンを対象として選択することで、彼らの特異なアプローチを議論の俎上に載せるということを試みた。

具体的には、生政治、主権論、統治というミシェル・フーコーが提起した問題群を引き受けるという点で共通するバトラーとアガンベンの民主主義論を検討することで、既存の自由民主主義体制という前提を問いに付すという急進的な姿勢に着目することで、現代の民主主義論の布置を描きなおすことを試みた。

また、こうした検討において常に参照軸となるアリストテレスにおける政治及び行為論を補助線として用いることで、伝統的な政治思想の叙述に依拠しつつ、そこからの懸隔を彫琢するという本テーマが内包する困難と特徴を極力捨象しないことを心がけた。

概 要

本研究では、現代民主主義論の比較検討というプロジェクトの端緒として、まずこれまで批判の対象となってきたジョルジョ・アガンベンの無為の戦略についてその意義と内実を明らかにするために、アリストテレス読解を基調としたハンナ・アーレントの行為論との比較を行った。

カール・シュミットによってジャン・ボダンによる古典的な形成から大きく変貌を遂げるようになった主権論とミシェル・フーコーによる主権的政治権力と異なる様式の権力のモードである生政治概念の一見自家撞着の様相を呈する読解に依拠して、現代政治の基礎構造を解明しようとするアガンベンの政治哲学は毀誉褒貶相半ばしながらも世界的な注目を集めてきた。

この段階において本研究が着目するのは、近年注目を集めているアガンベンの無為に関する議論である。アガンベンは何もしないという無為に特別の政治的可能性を看取するのであ

るが、これは多くの誤った読解に基づいた批判を招いてきた。そこで、ハイデガーの問題設定を基礎としてアガンベンがアリストテレスの存在論にこの主権と生政治の問題を看取していることを確認する。この議論を通じて、民主主義論における基礎となる部分を明確にした上で、のちの争点や論点を先取りすることになる。

アリストテレスは『形而上学』の存在をめぐる議論において潜勢力と現勢力の区別を導入している。このことはアリストテレスの倫理学と政治学と深く関わっている。すなわち、アリストテレスにおいて人間存在は幸福という目的に向かう途上にある制作的存在として捉えられているがゆえに運動、すなわち未完成の現勢力というカテゴリーが存在論的かつ倫理的重要性を獲得する。ところで、アーレントは『人間の条件』において、アリストテレスの活動論を踏襲しつつ自身の行為論を彫琢している。そこでは、製作モデルの目的論的行為に対し、活動の非目的論的な存在開示という側面が強調されている。

しかし、アガンベンによればアリストテレスにおいてあらゆる活動は幸福という究極目的へと関係させられているとともに、現勢力に潜勢力を優越させる議論に、非ロゴスの生の排除という契機を含んでいるという。全体主義批判というコンテキストにおいて、政治の制作モデルを退けようとする点でアガンベンと同じ立場に立つアーレントもまた、他者とともに始める能力としての潜勢力にその実現という現勢力を優越させているという意味で、少なくとも『人間の条件』において生政治的規定を踏襲している。

こうした議論を前提に再度、アリストテレスにおける両犠牲に立ち戻るアガンベンは潜勢力が現勢力に対して自律的であるために構成上必要とされる非の潜勢力に着目する。それはしないという無為に他ならないのであるが、この無為こそが主権の生政治的働きに対する

抵抗の基底となり、新たな政治への方途となる
としてアガンベンが期待を寄せる形象である。

この意味で、アガンベンはアーレントと望ましい政治をめぐる袂を分つことになる。すなわち、政治への能動的な参加に期待をかける
アーレントに対して、政治へと参加しないことを含めた無為の潜勢力が有する政治的価値に賭けるのであった。こうした対立に比較されるのが、現代において同様の問題設定を引き継いでいるジュディス・バトラーの議論であろう。

フェミニズム・ジェンダー論における活躍が知られるバトラーであるが、とりわけ9.11を契機として積極的に政治、とりわけ民主主義について議論を展開している。非主権的な政治的行為の可能性を担保しつつ、政治体の基礎における主権構造に関しては「革命」を通じた更新によって包摂の可能性を模索するアーレントに対し、アガンベンは主権原則から無関係な人間主体と政治的共同性を提案する。これらに対してバトラーは既存の自由民主主義におけるアナーキー的な契機の導入を通じて、生政治的主権国民国家の枠組みにおける民主主義の活路を見出そうと試みる。

このように先鋭化する民主主義論は、アナーキーを、すなわち無秩序をどのように理解するかという根源的な問いへと導かれることになる。

本文

本研究ではまず、現代イタリアの思想家であるジョルジョ・アガンベンの行為論の内実と政治的意義をハンナ・アーレントの行為論との比較を通じて、とりわけ両者の議論の基礎となるアリストテレス解釈に重点を置くことで明らかにすることを試みる。

従来、アガンベンの政治哲学について数多くの論者によって批判がなされてきたが、アガンベンの行為-無為について限定しても、枚挙に

遑がない。本邦においても、「ホモ・サケル」プロジェクトを通じて西洋政治の権力の分析を深化させるアガンベンが提示する無為の戦略に対して、岡田温司は結局のところ「それでどうすればいいんだ」という率直な疑義を呈している。

アガンベンには単純な行為ではなく、無為に賭けなければならない必然的な理由があり、このことは彼の生政治批判と密接に関わっている。のみならず、彼の民主主義論に対する評価と関係を有するために、民主主義論の比較研究を標榜する本研究において看過し得ない重要性を内包することになる、

そこで以下では、アガンベンを世界的な哲学者へと至らしめたホモ・サケルシリーズと呼ばれる著作群を中心に、行為の概念を導きの糸としてアリストテレスを参照しつつアーレントの行為論と照らし合わせることで、その抵抗論を政治思想のコンテキストに位置付け、その一見複雑な戦略の内実と意義を明らかにする。

『政治神学』における「主権者とは例外状態に関して決断を下すものである」という既に広く人口に膾炙した定式によってカール・シュミットは、従来の古代ローマにおける命令権を刷新して古代以来の混合政体論に対して提起されたボダン以来の主権概念を刷新し、戦後の『大地のノモス』における「土地取得」という着想に至るまで、法の基礎構造の把握を試みた。

こうしたシュミットの思索を広義の主権論として捉え、アガンベンはそこにミシェル・フーコーによる生政治の問題系を看取する。すなわち、西洋の法の基礎構造が人間の生の捕捉に基づいているとアガンベンは考える。この主権の生政治的基礎に抗うために、アガンベンは従来の主権論における構成的権力と構成される権力の問題、すなわちこの二つの権力が循環的に法権力の基礎となる暴力を正当化するというヴァルター・ベンヤミンによって定式化

された構造に対して脱構成的権力に積極的な意義を看取する。この脱構成的権力を思考し直す方途としてアガンベンが着目するのがアリストテレス以来の西洋形而上学の伝統において、正当な注目がなされてこなかったと彼が考える潜勢力の議論である。

アリストテレスは『形而上学』九巻において、人間の能力に則した潜勢力と現勢力の区別を導入する。すなわち、建築家が実際に家を建てていない時にも建築家であると考えられるためには、実際に働きにあるという現勢力ではなく、することができるという潜勢力を有していると考えなければならないという。しかし、『ニコマコス倫理学』や『政治学』において人間の本性的な働きを、幸福を志向し善く生きることであると定義することで、アリストテレスは現勢力を潜勢力に優越させる。この現勢力の優越によって、人間の善さを行為的な生と定義するアリストテレスであるが、この行為的な生は植物的な生や感覚的な生からは区別される。ここにアガンベンはアリストテレスにおける生の分割という生政治的規定を看取するのである。

しかし、また『魂について』においてアリストテレスは、することができる能力としての潜勢力が実際の働きである現勢力に移行するというメカニズムを考察するにあたって、注目に値する定義を潜勢力に与えている。というのも、潜勢力が常に現勢力へと移行しないためには潜勢力はしないことができる非の潜勢力でなければならず、現勢力への移行は、潜勢力が自己自身を現勢力へと与えることによって可能となるからだ。

それゆえに、潜勢力は自己自身以外を前提としないために、主権的、すなわち西洋の法構造の基礎を成しているとアガンベンは考える。アガンベンのアリストテレス評価は両義的である。というのも、アリストテレスの潜勢力の議

論に主権の構造を、潜勢力に対する現勢力の優越に生政治を看取すると同時に、潜勢力の非の潜勢力という側面にアガンベンは抵抗の契機をも見出しているためだ。この入り組んだ読解の導きの糸となるのが、アガンベンに多大な影響を与えるとともにアリストテレスの読解という点でアガンベンと対照をなすアーレントの行為論である。

アーレントは『全体主義の起原』において二〇世紀の全体主義を成立させた諸条件を考察した後、『人間の条件』において古代ギリシア、とりわけプラトン以降の哲学に顕著な制作モデルに依拠した政治の構想に、人間の個別性・唯一性と複数性を担保する行為に基づいた政治を対置することで非全体主義的な政治のありようを描き出そうと試みている。

アガンベンは『ホモ・サケル』以来、とりわけ人権と国民国家の結びつきを剔抉するアーレントの現代政治の分析に大きく負いつつも、『カルマン』においてアーレントの行為論を批判的に検討する。というのも、アーレントの行為論は、人間としての生物的必要性から解放された神的な観照的生を最高位に置いた古代ギリシア以来の傾向に抗し、アリストテレスにおける活動的生を換骨奪胎することで彫琢されたのであったが、既に述べたようにアガンベンはまさにアリストテレスの同じ議論に西洋の政治を規定する生政治を看取するためである。神に倣い観照することを人間の行為の最高のものとしつつ、他方で人間の本来的な働きを実践的なロゴスに応じた善のための活動であると規定することでアリストテレスは、単に生きることに対し善く生きることを優越させた。ここには何らかの生を前提として排除することで成立する包摂的排除の構造があり、アーレントの行為論はこの現勢力の優越に由来する生政治という陥穽から抜け出ることがない、というのが

アガンベン の 指摘 である。

実のところ、ギリシア以来の潜勢力概念を他者と新しくはじめるという権力と定義することで、アーレントはアガンベンの思索に先鞭をつけているといえる。しかし、アガンベンと同様に、目的-手段連関というベンヤミンによる法秩序の自己正統化という前提を共有しつつ、非暴力的な政治への方途としてアーレントが着目する非目的論的なプラクシスである行為は、アリストテレス哲学のより広い枠組みにおいては最高善へと目的づけられており、この意味でアガンベンの目には不十分なものと映った。さらに、アーレント自身が遺稿となった『精神の生活』において、行為を差し控えることの政治的意義に着目しているが、彼女の死によって妨げられたその議論が十分に展開されることはなかった。

これらを前提とすることで、アガンベンが無為に賭けているものの重要性が明らかになる。一方で、することもしないこともできるという潜勢力に実際に行うという意味での現勢力を優越させ、他方で現勢力に対する潜勢力の自律的なあり方を模索したアリストテレス以来の西洋の政治において、自ら以外を前提とせず自らを基礎付ける主権権力は同時に人間の生を包摂的に排除する生政治でもあった。

ところで、アガンベンはこうした権力の一側面を、権力は人間の潜勢力に働きかけることで作用すると表現している。権力によって人間はしないことができなくなる、すなわち行為しないという人間の非の潜勢力に働きかけることで、人間が行為へと駆り立てられるという。この意味で、アガンベンの無為は、まず非の潜勢力の保存として、すなわち権力の働きへの抵抗となる。しかし、この無為＝抵抗は同時に、脱構成的潜勢力として、主権権力と深く結びつけられてきた構成的権力に代わる到来する政

治への方途でもある。

本研究では、「純粋な無力」とまで評されてきたアガンベンの政治思想がどのように積極的な戦略を描き出しているかを明らかにすることを試みた。主権を潜勢力の問題として捉え直すことでアガンベンは、アリストテレスからアーレントに至るまでの政治的行為論が暴力的手段を正当化する目的論を前提に主権的生政治の相の元に留まっていると批判するとともに、潜勢力に構成的に存する非の潜勢力、すなわち無為に抵抗の契機を看取する。

アガンベンはこの無為の例を強制収容所の生き残りがなす証言や原始キリスト教の活動などに見出すとともに、神学や倫理学をも批判の対象に加えていくのであるが、これらについては機会を改めて検討する。

これらのアガンベンとアーレントの比較を通じて明らかになったのは両者の間に存在する、権力及び人間の行為についての根本的な対立である。この認識の相違ゆえに、アーレントが構想する政治は、非暴力的な人間の権力の行使とそれを可能にする政体の構想であり、他方でアガンベンは人間の能力における、しないということという非の潜勢力が権力論において、脱構成的権力として理解されうるという点に注目するのである。権力の、そして権力からの脱構成が有する政治的意義の重要性に着目するように促すのであった。

この両者とはまた異なった立場をとるバトラーはデモクラシーをめぐる議論における身体性の位相に着目する。本来、集会を意味するアセンブリがリベラルデモクラシーの制度下の過程において国民集会のみを指示するに至ったとして、バトラーはアセンブリが有する本来的な次元、すなわち街頭に現れる群衆という契機の重要性を強調する。主権的生政治的権能をより強く警戒するバトラーによれば、こう

した群衆の登場というアナキズム的契機の導入こそがデモクラシーにおける国家主権の抑制として人民主権が成立しうるといふ。この意味で、バトラーはデリダのデモクラシー論におけるアナキズム的異議申し立ての要素の強調を通じた急進化を行っているといえよう。

これらの検討を通じて明らかにされたのは、次のような事態であった。既存のリベラル・デモクラシーに対する補完やオルタナティブとして熟議民主主義やラディカル・デモクラシーといった立場が提起され、検討に付されて久しいが、それらは固有の文脈と問題意識を有しており、戦後の先進諸国における比較的安定した時期の後、オイルショック以降の高福祉と高成長というカップリングが成立しなくなり、台頭してきた新自由主義の興隆がもたらしたデモクラシーにおける諸問題に対する応答であると位置付けうる。人口に広く膾炙しているように、このデモクラシー論の内部における多様化の進展は共産主義への期待が現実味を失ったこと、リベラル・デモクラシー以外の体制が想像できなくなったことの証左でもある。

これまでの、アーレント、アガンベン、バトラーの検討を通じて浮かび上がったのは、デモクラシー理解をアナキズムという補助線を引くことを通じて検討することで、デモクラシー論におけるリベラル対コミュニタリアン、熟議対闘技といった従来の対立軸に対し、ポストナショナルな射程を有した共同性の構想を議論の俎上に載せることの必要性である。現代のアナキズムが提起する構想がある種の困難を有していることは看過し得ないが、理論的な行き詰まりを呈したデモクラシー論を再活性化させるという意義を有している。

このような視座から、再度アガンベンを思想を検討するならば、次のような評価が下されう。デモスの到来を志向しつつもアナキーの

意義を一層強調するアガンベンの思想は議会主義的なデモクラシーに対しては、高度資本主義による批判を踏襲する一方、擬似的な直接民主制を志向する立場に対しても全体主義の陥穽を免れ得ないとして与しない。古代ギリシアに端を発しキリスト教の教説を通じて改鑄を施されながら受け継がれた統治のパラダイムの分析に依拠することで、アガンベンは国民国家の枠組みにおける高度資本主義社会における権力の正当性を問いに付し、抵抗の方途を探りつつ、いかなる属性にも基づくことのない共同性の到来をもたらすアナキーの可能性を称揚するに至る。アガンベンは、抵抗を通じた国民国家と資本主義の脱措定によって、致命的な権力に捕捉されることのない真のデモスの到来という、撞着語法ではあるが、デモクラティック・アナキズムと形容しうる立場を提示する。

このデモクラティック・アナキズムの学術的な検討は今後の課題としたい。

今後の研究の見通し

本研究を通じて明らかになったのは、自由民主主義体制の検討によって現代民主主義論の急進的な一潮流においてアナキズムへの接近が見受けられるということである。

主権国家体制における生政治的権力の作用を真剣に捉えることで、彼らは共通して非主権的な政治的共同性を模索している。他方で、非主権的でありながらも協働や自治といった古典的なサンディカリズムに回帰するのではなく、「現代」という時代の特異な位置付けに着目する。

こうした成果によって示されるのは、現代政治思想を鳥瞰する新たな視座の可能性である。すなわち、戦中戦後を通じてなされた「秩序」構想として、カール・シュミットやマルティン・ハイデガー、フリードリヒ・ハイエクらをはじめとする一連の思想が挙げられるが、現代

の民主主義論の先端において現れているのはこの秩序構想に対する、秩序のある無秩序という姿勢である。

民主主義論の位相において捉えるならば、人民主権や憲法制定権力として構想されてきた近代政治の枠組みが、全体主義の到来を通じて再検討に付され、戦後秩序の再構築というコンテキストにおいて鑄造され直すことになる。この意味においては、民主主義はある種の永久革命にとどまる。

これに対し、戦後の国民国家の枠組みにおける秩序に則った民主主義を批判的に検討する現代思想は、一方で生政治的主権概念を脱

構築することで漸次的に包摂を志向し、他方で現代をあらゆる本質主義や目的論から解放された時代と捉え、脱アイデンティティを基調とした存在論的な共同性から出発している。

とりわけ、この後者を存在論的アナキズムとして、資本-自由-民主主義を基調とする戦後秩序構想に対するオルタナティブとして検討することが喫緊の課題であろう。

本助成金による主な発表論文、著書名

長島皓平「ジョルジョ・アガンベンにおける無為と行為——アリストテレス解釈をめぐるアーレントとの比較を手がかりに」『政治思想研究』二二号, 二〇二二, 一八一～二一二頁.